

幼児に教へる方法については、これまでに書いて来た事で、おほよそは解<sup>わか</sup>っていただけと思ひますが、この章ではより具体的に書き進めて行きたいと思ひます。いつ、どんな方法で、何を教へるか、といふ事です。

まづ「いつ」といふことですが、端的<sup>たんてき</sup>に言へば早ければ早いほど良い、と言へます。やり方さへ間違へなければ、つまり「嫌<sup>いや</sup>がるのを無理にさせる」といふことさへなければ、早過ぎて悪い結果を生むことはまづありません。

子供に物心がつき、周囲の何か、あるひは誰か<sup>だれ</sup>に好奇心を示した時が、最初のチャンスです。優しい、はっきりした口調で、その名前を繰り返し教へてやりませう。そして、次に、それを字に書いて、子供に見せながら、また繰り返し、発音するのです。もちろん漢字が使へれば漢字で書くのが良いことであるとは言ふまでもありません。ただし、そのものが通常ひらがなやカタカナ、アルファベットなどで表示されるものがあれば、そのまま使ふことが一番良い方法です。

私の年来の主張は、子供に余計な負担をかけない、大人の世界で使はれてある言葉や文字を、子供のうちから教へて、途中で訂正する

といふ二重の負担をかけない、といふ事ですから、ここをくれぐれも注意して下さい。

仮に英語を母国語とする子供に対して、英語の綴<sup>つづ</sup>り字は不規則で覚えにくいからといって、まづ発音通りのスペリングで教へてやり、少し大きくなってから、正しいスペリングを教へてやったとしたら、どうでせうか。私が思ふのに、その子は一生、正確なスペリングを覚えられたいか、覚えられたとしても、覚え直すのに大変な苦勞をすることになるでせう。

日本の子供にひらがなを教へ、それから漢字を教へることも、根本的には同じ理屈です。ひらがなは易<sup>やさ</sup>しいから、と、一見子供のためを思ったやり方が、実は子供にとっては大変な負担になるのです。心してやりたいものです。

次は「どんな方法で」といふのを、もう少し具体的に御紹介します。これは「どんな漢字をどんなふう<sup>やう</sup>に教へたら良いのか」といふ御質問に答へるものです。本当は、めいめいのお子さんの興味に従って、めいめいのお母さん方が工夫な<sup>や</sup>さるのが一番良いのですが、それでは雲をつかむやうでどうしたら良いか判らない、といふ方もあ<sup>わか</sup>らっしゃるので、

あへて、一例を挙げることにしました。これを手がかりに、いろいろと発展させてみていただきたいと思ひます。

まづ、画用紙を切ってカードを作って下さい。大きさは「6×10」センチ位が適当でせう。そこに、子供の好きなものを表した漢字を書き入れます。たとへば“莓”“桃”“梨”といふやうな漢字が良いと思ひます。

これを、例へば「食事の前後」と時を決めて子供に見せ、読んで聞かせるのです。子供が食卓に着いたら、「ちょっと、これを見て。これは“いちご”と読む字よ。では、この字をよく見て“いちご”って読んでごらん」と言ひます。

子供がカードを見て「いちご」と読んだら「はい、よく読めました。それでは、<sup>ごはん</sup>御飯をいただきますせう。“いただきます””と言って食事にします。

食事が済んだら、先ほどのカードを取り出して、子供に見せ、「この字は何と読む字だったかしら」と聞いてみます。たいてい「いちご！」を正しく読むことでせう。読めたら、「よく読めたわね」と、さらりと褒めておきます。褒めないのもいけませんし、褒めすぎてもいけません。

また、もし読めなくても、がっかりすることはありません。すぐ、間を置かずに「これは“いちご”といふ字よ。では、この字をよく見て“いちご”と

読んでごらん」と、初めて教へるやうな調子で教へてやります。決して「さっき教へてやったでしょ」などと言つてはなりません。子供は萎縮するか、<sup>はんぱつ</sup>反撥するかで、下手をすると、このゲームを続ける意欲を無くしてしまひます。

最初が<sup>かんじん</sup>肝腎です。最初に、このゲームが<sup>おもしろ</sup>面白いと思つた子供は、<sup>かいめん</sup>海綿のやうに漢字を吸収して行きます。しかし、最初に「漢字を押しつけられた」と感じた子供は、漢字<sup>ぎら</sup>嫌ひになってしまうかも知れません。

また、子供が極めて幼い時、例へば二歳前とか一歳未満といふ時は、漢字を目で見て、頭の中に吸収してゐても、言葉になって出て来ないことがあると思ひます。しかし、多分それは何らかの形で外へあらはれると思ひます。例へば、後の章で詳しく例を引きますが、その漢字を見ると<sup>うれ</sup>嬉しさうに顔が輝くとか、手を打って笑ふとかいふ動作が見られます。ですから、子供が応答しないとしても、学習は着々と進んでゐるので、続けてやって下さい。

あるひは、子供が反応を示すまで、日数が長くかかることがあるかも知れません。これも、お母さんの忍耐が必要です。必ず、カードに興味を示す時期が来るはずで、それまで忍耐強く、やってみて下さい。

とかく畑に種を播く人は、収穫を急ぎたがるものです。しかし、植物でさへ、種を播いてから芽を出し、茎が伸び、葉が茂り、花が咲いて実を結ぶまでには、長い月日がかかるではありませんか。まして子供に良い種を播いてから、穫り入れが出来るまで、さう速く時が経つものではないでせう。ひとへに、お母さん方の愛情と忍耐を期待するものです。

さて、この漢字カード学習は、子供にとってはゲームでなければなりません。決して子供の心に負担であると思はせてはならないのです。子供に「覚えなければいけない」と思はせてはいけません。これは前に述べた理由の他に、「覚えよう」と思って覚えたものは、必要が無くなるとひとりで忘れてしまふといふ性質がある、といふ理由からです。反対に、いつとはなしに覚えたものといふのは、なかなか忘れないものです。ですから、子供に「覚えよう」と思はせるより、自然に覚えるのを待つ方が良いのです。

この、食事の前後に行ふ漢字学習は、せいぜい 10 秒程度しかかかりません。それより長い時間をかけますと、かへってよくありません。食事の前に 10 秒、食事の後に 10 秒、合はせて 20 秒です。一日三回の

食事をしますから、全部で 60 秒、つまり 1 分間で済みます。

記憶の原理は第一が“関心”、第二が“反復”です。「カードに書く漢字は、子供の好きなものを表したものが良い」と言ふわけは、さういふ漢字が“関心”が強く、覚えやすいからです。

第二の“反復”についてですが、これは一日六回、それを一週間続けてやってほしいと思ひます。すると四十二回反復することになります。これだけ反復したら、きっと忘れなくなります。

さて、一日目は、“<sup>いちご</sup> 莓”といふ一枚のカードを教へました。二日目には、もう一枚、別のカードを加へます。“莓”を読んだ次に、例へば“桃”といふカードを見せて、読んでやり、子供にも繰り返させるのです。

このやうにして、三日目には三枚目のカードを加へ、四日目には四枚目のカードを加へて、七日だつと、カードが七枚になります。そこで、八日目になったら八枚目のカードを加へる代りに、一番最初のカードを除いて下さい。古いカードはもう卒業です。九日目には、また一枚カードを加へる代りに二番目のカードを除きます。除いたカードは、それぞれ四十二回づつ繰り返し読んでみますからもう十分でせう。

新しいカードの学習に 10 秒かかっても、古いカードの学習は六枚全

部でも 10 秒とはかからないでせうから、一回の学習時間は合計ざっと二〇秒、一日六回で二分に満たない短いものです。これが、この学習の良い所です。ひょっとすると、子供が「もっとしたい」とせがむかも知れません。が、せがまれる位で止めておくのが良いのです。さうすれば、「良い子にしてみたら、御褒美ごほうびにまたしてあげるからね」などといふことも出来るわけです。

これだけの学習で毎日一字ずつ覚えて行きますと、一年間には三六五字、三年間には一千字を越えてしまひます。三歳から始めたとすれば、小学校に入学するまでの間に一千字の漢字が読めるやうになるわけです。

今の中学生の漢字を読む力は、平均、とても一千字には達しませんから、中学生の平均以上の力を持ってゐるといふことが出来ます。小学校に入学する前にこれだけの力をつけておけば、子供はひとりでに読書好きになり、読書をすることによって漢字力、読解力をますます伸ばすことでせう。

昔から「石の上にも三年」といふ諺ことわざがありますが、何事によらず三年継続してやりますと、その効果が目に見えてくるやうです。漢字学習

を三年間継続してやった子は、例外なく読書好きな子になり、何事にも意欲的、積極的に取り組む、忍耐強い頼もしいたの子に育つてゐます。

しかし、これを実行する段になると、周囲から反対の声が上がるかも知れません。

「小学校に入学する前に、中学生の平均漢字力を上廻るまは力をつけるなんて、とても出来るわけがない」とか、

「それほどまでの力をつけるには及ばないのではないか。せいぜい二、三年の力がついたら十分だらう」といふ意見が聞かれるかもしれません。

しかし、さうではないのです。今の学校教育では、学習時期を誤つてゐるために、努力しても一千字の漢字の習得は困難なのですが、適時期である幼児期の三年間でしたら、誰にでもそれが容易に出来るのです。もしも、幼児期に出来ないでしまったら、小・中学校では手遅れで、どんなに努力しても出来ない子供がきっと多数を占めるのです。可哀かはいさうなことではありませんか。

ですから、五、六年生程度の漢学力がついても、決して満足してゐてはいけません。必ず幼児期の三年間に一千字の漢字を習得させて、

楽しんで読書の出来る子供に育て上げていただきたいと思います。それが、毎日僅かに二〇秒間の学習を六回、三年間続けることによって必ず出来るのですから。

では、初めの一カ月間に、教へるのに適当と思はれる漢字を一例として挙げてみませう。

莓 桃 柿 栗 梨 口 目 耳 鼻 手 足 顔 頭 首 齒 舌 胸  
腹 腕 指 爪 犬 猫 牛 馬 象 猿 山 川 空 海 雨

是非、この漢字でなければいけない、といふものではありません。他の漢字でも、もちろん良いのです。が、この例のやうに、ある一纏まりのグループ、つまり“莓”から“梨”までの果物グループや、“口”から“爪”までの体の名称グループといふやうに、何らかの関連をもった漢字を続けて教へるのが良いやり方だと思ひます。子供なりに関連づけて覚えられますし、うまく行けば「それじゃあ、あれは？ これは？」と、自分から積極的に質問して来るかも知れません。さうなったら、しめたものです。質問された時は、必ず答へてやって下さい。ここが、将来、子供が知的好奇心に富んだ人間になるか、ならないかの境目なのですから。

ノーベル賞の受賞者・湯川秀樹博士のお母さんは、子供が何か質問した時は、どんなに忙しい仕事をしていても、その仕事の手を休めて、子供の目を見つめながら、その質問に答へた、といふ話を聞いたことがあります。天才・湯川秀樹博士を育てたのは、お母さんのその態度だったのではないでせうか。

かう言ひますと、皆さんは、天才は遺伝によるもので、後からいくら努力しても無駄だと思はれるかも知れませんが、湯川博士の御両親が頭の良い方だったから、湯川博士等をはじめとするお子さん方が皆、頭が良いのは当たり前だらう、と。しかし、私は「湯川博士の御両親の立派さは、御自身の頭の良さもさることながら、やはり子育ての態度の見事さにある」と思ひます。

最近の遺伝子に関する研究によりますと、遺伝子は特ってある膨大な情報量のうち、顕在化するの、つまり表面に現はれて来る特徴は、全体のわづか一パーセントに過ぎないさうです。また、遺伝子の特ってある情報量を文字にすると、三十億字分(この本のおほよそ三万冊分)ださうですが、その中のどの情報が現はれて来るかは、環境によって決まるとも聞いてみます。ですから人間の能力や性格は、遺伝よりもむ

しる環境に左右されるのではないかと思ひます。昔の人は観察力が優れてゐて、いみじくも「氏<sup>うじ</sup>より育ち」と言つてゐます。昔の人はいろいろな例を数多く見て、そのやうな結論を下したのでせうが、それが科学に裏づけされたといふのは面白い事<sup>おもしろ</sup>ではありませんか。

それでは、今後子供に教へるのに適したと思はれる字を、次に列挙しませう。これは子供が好きさうな字の数例です。本当は、その子供が好きな、最も適した字を知つてゐるのは、その子供のお母さんです。ですから、何度も繰り返して恐縮ですが、お母さんが字を選ぶのが一番良いのです。ですから、これは、いはば参考例です。

体に関する言葉

口 目 耳 歯 舌 手 指 足 首 頭 顔 鼻 腕 胸 腹 背中

人に関する言葉

お父さん お母さん お祖父<sup>ぢい</sup>さん お祖母<sup>ばあ</sup>さん お爺<sup>ぢい</sup>さん お婆<sup>ばあ</sup>さん  
 伯父<sup>をじ</sup>さん 叔父<sup>をじ</sup>さん 小父<sup>をじ</sup>さん 伯母<sup>をば</sup>さん 叔母<sup>をば</sup>さん 小母<sup>をば</sup>さん お兄  
 さん お姉さん 弟 妹 男の子 女の子 赤ちゃん 先生 本人の名  
 前(例 山田太郎)

食べ物に関する言葉

いちご 桃 柿 梨 栗 林檎<sup>りんご</sup> 蜜柑<sup>みかん</sup> 葡萄<sup>ぶどう</sup> 西瓜<sup>すいくわ</sup> 胡瓜<sup>きゅうり</sup> 大根<sup>だいこん</sup> 人参<sup>にんじん</sup>

たまねぎ 玉葱<sup>たまねぎ</sup> 薩摩芋<sup>さつまいも</sup> ジャガ芋 山芋 肉 魚 牛乳 卵 菓子 砂糖 塩

品物に関する言葉

絵本 人形<sup>つみき</sup> 積木 色紙 鉛筆 机 椅子<sup>いす</sup> 時計 鏡 針 糸 着物  
 洋服 靴<sup>くつ</sup> 冷蔵庫 洗濯機<sup>そうじき</sup> 掃除機 新聞 電話 電燈 電気 茶碗  
 布団 皿<sup>はし</sup> 箸

家の中の物に関する言葉

家 門 戸 屋根 玄関 客間 茶の間 寢室 子供部屋 風呂<sup>ふろ</sup> 台所  
 便所 洗面所<sup>らうか</sup> 廊下 階段 寢台 本棚<sup>げたばこ</sup> 下駄箱 床<sup>たたみ</sup> 畳

家の外に関する言葉

公園 遊園地 道路 橋<sup>はし</sup> 踏切<sup>ふみきり</sup> 横断歩道 信号機 駅 店 学校 幼  
 稚園 病院 交番 警察署 消防署 郵便局

乗り物に関する言葉

三輪車 自転車 自動車 汽車 電車 船 汽船 飛行機 消防車  
 救急車 新幹線

植物に関する言葉

草 木 葉 花 幹 枝 芝<sup>しば</sup> 梅 桜<sup>つばき</sup> 椿 松 杉<sup>きり</sup> 桐 柳 竹<sup>かへで</sup> 楓

ふじ はぎ あさがお  
藤 菊 萩 朝顔

動物に関する言葉

うさぎ たぬき きつね やぎ  
牛 馬 犬 猫 兎 羊 象 熊 猿 狸 狐 狼 豚 虎 鹿 山羊  
らくだ きりん きし うくひす つばめ すずめ あり せみ てふ  
駱駝 麒麟 鳥 鳩 鶴 鶏 雉 鶯 燕 雀 虫 蟻 蝉 蝶  
かへる ほたる はちへび こい さけ どぢやう  
蛙 蛍 蜂 蛇 鯉 鮭 鱈 亀 貝

天体・自然に関する言葉

日 太陽 月 星 北極星 天の川 空 雨 雷 雪 晴 曇 雲 風  
あらし  
嵐 台風 光 虹 山 川 海 湖 池 沼 島 岩 石 土 田 畑  
火 森 林 波 氷 野原 富士山

抽象的な言葉

上 下 右 左 前 後 中 外 朝 昼 晩 夜 夕 方 東 西 南 北  
春 夏 秋 冬 年 日曜日 一週間 正月 色 青 赤 白 黒 黄  
緑 紫 茶色 灰色

動詞

笑ふ 泣く 歩く 行く 走る 止まる 乗る 帰る 出る 入る 来る  
起きる 寝る 眠る 読む 書く 見る 聞く 話す 作る 飲む 食べ  
る 歌ふ 着る 脱ぐ 売る 買ふ 立つ 並ぶ 洗ふ 磨く 引く 押

す 打つ

形容詞

大きい 小さい 長い 短い 太い 細い 多い 少ない 広い 狭い  
重い 軽い 高い 低い 深い 浅い 遠い 近い 速い 遅い 早い  
良い 悪い 強い 弱い 熱い 冷たい 暑い 寒い 明るい 暗い  
新しい 古い 好き 嫌ひ 美しい 汚い 賢い 危い 痛い 甘い  
辛い 塩辛い 苦い 丸い 円い 四角い 細かい 粗い 優しい

かういった字を手始めとして、子供が興味を示す字を教へて行けば  
よろしいでせう。